

新連載

## 舞鶴の歴史をたどる

Vol.3

## お金の話—舞鶴の貨幣の歴史—

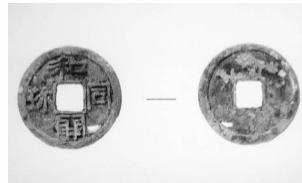
舞鶴市文化財保護委員 高橋 聡子

物々交換は不便なので、やがて珍しい貝や布・牛・銀などを「お金」にして物の取引をするようになります。山良川左岸の志高は紀元前5千年から人が住み集落がありましたが、紀元前後の遺跡から土器の壺にぎっしり詰まった宝貝が見つかりました。南海産の宝貝は中■では貨幣として使われています。

日本の貨幣は708年発行の和同開珎に始まるといわれています。唐に習って和銅元年に銀銭と銅銭を鑄造しましたが、すでに7世紀後半にそれまで銀そのものを流通の補助手段として使っていたのを銭貨の形にしており、「無文銀銭」と呼ばれています。

その後、平安中期の958年まで「皇朝十二銭」といわれる12種の銭貨が発行されました。それらは首都とその周辺のみ流通したといわれますが、和同開珎の銀銭が唐の長安城址から、銅銭が渤海(満州東部)の東京城址から出土し、■際交流の広さを語ってくれます。大浦半島の浦入遺跡からも和同開珎、萬年通寶(760年)、神功開寶(765年)、中■銭の天聖元寶(1023年始鑄)が各1枚出土しています。

律令政府は皇朝十二銭と称される銅銭を発行して流布を■るための対策を講じましたが、支配力が衰えるとともに■産銅の不足もあって鑄銭事業も打ち切れ、再び米や布などの物品が貨幣として使用されることとなります。そのような平安末期に中■銭が日本に流入し、12世紀末から13世紀初めに輸入が急に本格化するのですが、末法思想の流行する中でお経を納める経筒のための銅資源確保もあったのではないかとされています。鎌



浦入遺跡から出土した和同開珎(表・裏)



浦入遺跡から出土した貨幣

倉大仏も中■銭で造られたようです。

鎌倉時代中期以降、当地方においても米や絹などの年貢納入も銭納化となり、銭貨が広く流通していたと考えられます。市場において日常必需品との交換・売買のなかで換金しました。1334年若狭遠敷の市場に売買に出向いた小百姓は絹布・縫小袖・真綿・刀5腰等とともに銭3貫250文を所持しています。銭は97枚を紐に通しひと差し100文とし、1貫文を束ねて運搬していました。

平成8年、西地区を代表する吉利門隆寺の門前の地から14世紀中頃に埋蔵されたらしい■物に入った中■銭11907枚(約12貫文)が見つかりました。銭貨を魔除けや福を招くために使う風習が中■から入ってきており、■くは胞衣を納めた壺に入れたり、後には火葬骨を納めた蔵骨器の中(地獄の沙汰も金次第なり)や建物を建てる時の地鎮祭に埋めたりしましたが、これは呪術・祭祀等を目的とした埋納銭ではなく備蓄銭と考えられます。室町時代に質の悪い日本製の模造銭や私鑄銭が造られました。戦■時代には諸■の金山銀山の開発が進み、戦■諸侯は独自の金銀貨を造り軍用資金の充実を■りました。

1601年(慶長6)に徳川家康が幣制を統一します。幕府は金座・銀座・銭座を設け、貨幣の鑄造権を独占して金貨・銀貨・銭貨を発行し、この三貨を全■通用の正貨としました。

幕府は諸藩に対して、各領内における正貨を補うため紙幣の発行を許可しましたので、■辺藩では1694年(元禄7)に初めて藩札を発行しました。■辺藩札は10匁、1匁、5分等銀札のみの発行であり、時々札改めが行われ改め印が押されましたが、それは偽造札が出回ったために取られた措置といえます。表に「此札持参次第銀子可渡候」と印されていました。大橋東詰め南側に藩札を管轄する札所を設置し、1803年までに総発行銀高430万貫、約67万枚が発行されました。

明治新政府は各藩札の現地相場に基づく回収を行い、明治新貨と交換されました。銀札10匁=新貨7銭1厘、2分=1厘。



■辺藩札